事相盛興期の台密、慧檀兩流の大觀、慧檀諸師の著作、二箇相承の問題、日本天台の解釋法、機根の分類、教判上の特色、本迹二門の問題、止觀と法華との交渉、口傳法門の略說、日本天台の分裂問題、日本天台の墮落と叡山の頽廢、第五編には近世天台史概說を述べてある。尙ほ卷末には、止觀業遮那業の血脈並に索引を添へてある（四六版 五二〇頁、東京明治書院發行、價三・五圓）〔松野〕

◉江都督納吉願文集　平泉澄編著

才智過人、文章勝他、誠是天下明鏡也と中御門宗忠をして嘆ぜしめた平安朝後期の碩學大江匡房の願文集である。此書は本來六卷より成るものであるが、續群書類從卷第八百二十七に收められたる第三卷のみ世人の觸目し得る所であり、一代の文人の作る所の文章は、他に續本朝文粹朝野群載等に散見するのみであつた。

平泉博士が大正十五年秋塙檢校の群書類從に採錄したる大永八年書寫の神皇正統記を水戸附近の六藏寺に求め赴き、三回討査して遂に求め得ず、而して意外なる古寫本を見出した。卽ち戰國の頃霞浦の一僻村の該寺に土龍と自稱し居たる學僧惠範の夥しき著作、正嘉二年の性靈集、建治二年の續靈性集等。江都督納言願文集も亦この時の發見に係る。

六藏寺本江都督納言願文集は第四卷を缺くのみで、他五卷は之を完備し、然して永享七年の書寫により、學僧惠範の手澤本であり、又水戸義公の親閱を經たと推せられてゐる。

刊行せられたる內容は、卷第一（帝皇に關するもの）に後三條院五七日御願文を始めとして二十二篇、卷第二（仙院、后妃）は十八篇、卷第三（大臣、諸卿）に二十四篇、卷第五（女人、尼公）に二十三篇、卷第六（上客、庶人）に二十八篇、計百十五篇を數へ、右相府室家願文圓德院の願文等寬治以前の傑作三十篇を存してゐる。

この刊行が集の缺文を補ひて、其名一世を靡ひてしかも其作多く傳はらなかつた名儒大江匡房卿の文才を偲ぶにとゞまらず、その文が當時の名流の爲に草する所なるが故に歷史的色彩に富み、世俗的關係と共に宗教思想を

現して史家を益する所尠くないであらう。（菊版圖版八、本文三〇〇頁、價五・〇〇、至文堂發行）〔寺尾〕

◉正明寺小志

本書は滋賀縣蒲生郡日野町松尾の古刹正明寺から、今秋十月同寺に於て嚴修せらるべき後水尾天皇二百五十回聖忌の記念として刊行したものである。當寺はもと聖德太子の開創と稱せられた古刹であつたが織田信長の兵によつて堂宇を燒かれ寺領を沒收されて以來全く荒廢に歸し、其後德川時代の初期に頓宮宗右衛門なる者の發起により永源寺の一絲和尙が再興に盡力し、後水尾上皇の叡慮によつて御下賜金を忝ふして堂宇の造營に着手したが一絲は其の落成を見るに至らずして寂し、其後黃檗の龍溪和尙が住山するに至つて一層優渥なる上皇の恩惠を蒙つて伽藍は次第に完備し、第三代晦翁第五代寂門の時も皇室の外護によつて寺運益々揚つたのであつた。本書は主として此の一絲以來寂門に至る迄の寺運恢興の事歷を詳記してあつて、本縣の歷史に精通せらるゝ前滋賀縣史編纂主任牧野信之助氏の特志により執筆されたものである、附錄には當寺所藏の一絲和尙の書狀三通並に當寺の建造物、寶物を列記してある（和裝七八頁、滋賀縣溪道元氏發行、非賣品）

◉菅居古文書　第一卷

河內譽田八幡宮の舊社家であつた菅居家は由緒ある舊家で多數の古文書類を所藏してゐるが、昨年當主正治氏が偶ま父祖の遺言して或る時期まで開封を禁じて置いた一箱を開封すると共に代々傳承せる古文書古記錄入りの二個の唐櫃を開見したるに端を發して是れ等に依つて祖先の事蹟を明瞭ならしむべき必要を感じ之を京都帝國大學の西田直二郎博士に商り四月以降整理と調査に着手されたが、先般その整理を完了されたから、之を子孫に傳へると共に國史研究の資料にもとて刊行されたのである、その編纂は西田博士監修の下に神宮皇學館教授佐藤虎雄氏が專ら之に當られ、全部三卷より成り第一卷には古文書、引續き刊行さるべき第二卷には八幡宮に關する記錄、日錄、並に宗旨人別帳の類、第三卷には八幡宮並に神祇に關するもの、雜記錄を收める由である。是等の古文書